

# 書簡と書簡体詩について

## Pope の企みを手がかりに

福本幸之

Louise Curran は近刊書において「18世紀以前、作家が存命中に自らの書簡を出版した例は限られていた」とした上で、直後で「Alexander Pope は、存命中に自らの書簡を相当な程度出版した最初のイギリス人作家の一人であった」と述べている<sup>1</sup>。実はこの書簡の出版には、ポープによる恐ろしく手の込んだ計略が潜んでいた。Maynard Mack や Rosemary Cowler とも指摘するように、当時、著者が自分の書簡集を出版することは、非常にはしたない行為と捉えられ、およそ容認されるべきものではなかった。そこでポープは、同時代人で非常に悪名高い出版者 Edmund Curll を利用したのである。その顛末を略述すると、まずポープが Henry Cromwell 宛てに出した書簡を、1726年にカールがポープに無断で出版したことに端を発する。これに懲りたポープは友人に連絡して、自分が書き送った書簡を返却するようお願いし、それに応えて最も多くの書簡をポープに返却したのが John Caryll であった。一方、カールはポープの書簡集のみならずその伝記も出版せんと企んでいた。そこでポープは偽名を使ってカールに手紙を送り、「ポープの伝記を書くに当たってきっと役立つ、彼の書簡の大きなコレクションを自分は持っている」と持ちかける。最初は警戒していたカールも、ついに1735年にポープの書簡集を出版する。つまりポープの狙いはカールに著者の断りを得ない海賊版の書簡集を先に出版させることで、著者自らオーソライズした真正版の書簡集を出さざるを得ないという状況を生み出すことであったのだ。ポープは思惑通り1737年に自らの書簡集を真正版と称して堂々と出版した。

しかもポープの謀りごとはそれだけではなかった。先ほど触れたように、カールの悪行に懲りたポープは、自分が送った書簡を返却するよう友人に要請し、それに応えてキャリルが最も多くの書簡を送り返して来たのだが、実は1735年にポープがカールに掴ませ、出版させた書簡には、元々キャリル宛てであったはずの書簡が、宛名を変えて忍び込ませてあったのである。また変えたのは宛名だけではなく、元々キャリル宛てであった書簡の一部を都合よく切り貼りし、新たな書簡をでっち上げていたのである。つまり本文も改竄していたのだ。そして宛先、本文に及ぶこうした改竄は1737年にポープ自らオーソライズした版にもそのまま引き継がれた。ここで一つの疑問が湧いてくる。つまり当のキャリルにすれば元々自分宛ての書簡を求めに従ってポープに返却したところ、今度は宛名や本文が改竄されて出版された訳であり、当然困惑し、友人ポープに疑いを抱いたはずでは、という疑問である。ここで忘れてはならないのは、表向きには1735年の書簡集はあくまでカールが著者ポープの了承を得ずに勝手に出版したことになっている、という事実である。つまり改竄については、全てカールにその罪をなすりつけることが出来たのであった。それでは、1737年に出たポープ自身がオーソライズした版は大丈夫だったのか、という問題だが、実はキャリルは前年1736年に亡くなっており、元々の書簡の内容を知る者はこの世にはいなくなっていた。こうして、ポープの完全犯罪は完成した。おそらく巧妙で入念な企みである。

それではなぜポープはそこまでして自らの書簡を出版したのだろうか。我々現代人は書簡を個人的な近況や用件を伝えるプライベートな書き物だと考えるが、ポープにとって、それはあくまで受け手に向けて語るという体裁を取りつつ、実は世間一般に向けて自らの省察、意見を伝える媒体であった。この事は例えば1730年代に出版された *Epistles to Several Persons* が *Moral Essays* という別名を冠せられていることにも暗示されているし、より直接的には1712年11月7日付けの Richard Steele 宛ての彼の書簡に表されている。この書簡においてポープはハドリアヌス帝の辞世の詩について自らの解釈を披露した上で、末尾で「もし私の考えが正しいとお考えなら、*The Spectator* 誌に載せて下さい」と結んでいる。そして実際にスティールは『スペクテーター』532号でポープが書いた書簡を、ほぼそのまま掲載している。つまりポープはその内容によっては書簡を決してプライベートなものではなく、公刊されるべきもの、世間に向けての自己表現の一つの手段として捉えていたのだ。

この点については、ポープがカールに出版させた書簡集とほぼ同じ頃に出版された、ポープの自己弁明的要素が濃い書簡体詩、*An Epistle to Dr. Arbuthnot* と彼の本物の書簡を比較して見れば一層明らかとなる。この詩の75から76行目において、アーバスノットがポープの風刺のやり方に対し「友よ、慎むがよい。君は危険な物事を扱っているのだ。私なら王妃や大臣、国王を名指したりはしない」と忠告している。無論これはポープの作品の詩行であり、実際にアーバスノットがこう言った訳ではなく、あくまで書いているのはポープである。それでは現実のアーバスノットはどういう立場であったかと言うと、ポープに宛てた本物の書簡において彼は「私の最後の願いは…悪徳に対するあの気高い軽蔑と嫌悪を君が持ち続けることだ。しかし、常に身の安全にはしかるべく

配慮し、人を懲らしめるよりは矯める方に意を用いてもらいたい」と述べている。一方ポープはこの書簡の直後に、「残念ながら、懲らしめることなく矯めることなど出来ませんし、最良の教訓であっても、それを強制させる見せしめがなければ、最良の法律同様、あまり役に立たないものとなるであります」という返信をアーバスノットに宛て書いたことにしている。実際にはこの書簡は、ポープが捏造し、1737年出版の書簡集に紛れ込まされたものである。つまり、これらの書簡体詩と書簡は共に相補的な関係にあり、両者が一体となってポープの風刺哲学を表明する媒体となっているのである。つまりポープの視点に立てば、書簡と書簡体詩がそれぞれカバーしているはずのプライベート / パブリックという領域区分は極めて曖昧であったと言える。そしてこれが、ポープが本来プライベートなものであるはずの書簡集を、姑息な計略を用いてまで、パブリックなものにし、さらにそこに、わざわざ自らの風刺哲学を謳った文面をでっち上げ、滑り込ませていた理由であろう。

その一方で同じ「自己表現の手段」と言っても、必ずしもそれほど高邁な理念に基づくものではない動機から、書簡を公刊したケースも見られる。それは *An Epistle to Dr. Arbuthnot* において、ポープが John Dennis に言及した箇所と、同じ頃彼が捏造した書簡を突き合わせて見ることからも検証できる。まず *An Epistle to Dr. Arbuthnot* の 155 から 56 行目を見てみる。ここは、はっきり実名を挙げていないが、デニスを意識した箇所、語り手ポープは「金に困ったか、狂気に駆られて出版したとしても、私はペドラムやミント相手に喧嘩したことはなかった」と述べている。なおここでの「ミント」とは、借金を返せない人間の避難所を表わす。続く 370 から 71 行目では、はっきりとデニスの名前を出し「デニスとて認めるだろう。この恐るべき風刺家は、自惚れた時には敵となるが、貧窮した折には力になってくれることを」と述べられている。そして「この恐るべき風刺家」とは語り手であるポープ自身を指すと考えられる。そしてこれらの詩行と相補的な関係にある書簡が、ほぼ同じ時期にカールに出版させた、ポープが捏造した 1711 年 6 月 15 日付けのものである。これはキャリル宛ての 2 通の書簡から、それぞれの一部分を抜き出し、それを繋ぎ合わせて若干字句に修正を加え、でっち上げたもので、結果として専らデニスのみを扱った、謂わばデニス特集号と呼ぶべき書簡となっている。その上でポープはこの書簡において、「もしデニスがこの時不運に見舞われていた、ということを知っていたら、それだけで十分、*An Essay on Criticism* で彼の名を挙げない理由となっていたことでありましょう」という主旨のこと述べている。実際『批評論』が出た 1710 年代、デニスは次から次へと襲い来る不幸に見舞われていた。他方、20 年後の 1733 年 12 月 8 日に、*The Provoked Husband* がヘイマーケット劇場で、デニスのための寄附興行として上演された時、ポープはこの企画に手を貸し、匿名でプロローグも書いた。つまり *An Epistle to Dr. Arbuthnot* における「自分は貧窮している人間を攻撃したことはない」とか「自分は世間から恐れられる風刺家だが、金に困っている者の味方だ」という主張は、実際に最近自ら行った慈善行為、つまりデニスのための寄附興行に協力した件を背景に、「デニスが不運に見舞われているのを知っていたら『批評論』では揶揄しなかった」という、20 年以上前の自らの書簡の言葉と相補的な関係を築きながら、博愛主義者ポープというイメージ作りに役立つのである。そして、それこそがポープが捏造した書簡を *An Epistle to Dr. Arbuthnot* と同時期に出版させた理由であろう。

イメージ作りに関してもう一つ、捏造された書簡を紹介しておく。先にスティール宛ての書簡でポープがハドリアヌス帝の詩の解釈をめぐって自説を披露した上で、末尾で「『スペクテーター』誌に載せて下さい」とお願いしていたことを紹介した。ところが『スペクテーター』誌に自説が紹介されたのを見たポープは一転、「ハドリアヌス帝の詩についての考えを、あなたが私のものとして公刊されたのを残念に思います。…私が自分の考えをあなたに送ったのは、一重にあなたの意見を伺いたかったからであり、自分の意見を公にするためではありません」というスティール宛ての書簡をでっち上げている。自分でお願ひしておきながら、その舌の根も乾かぬうちに、よくもまあこんな白々しいことが言えるものだと感心する。これも後になって、自分は当時こんな慎み深い人間だったのだぞ、とイメージ・アップを図ったものであろう。

ポープが書簡を自らの作品と同じく自己表現の手段としてみなしていたことは事実だが、彼の場合、必ずしもそこまで高邁な動機から書簡を捏造したとは言いきれない。つまり見栄とか虚栄心だとか、極めて世俗的な動機も働いていたというのが現実であろう。ただし、この点については文学史上におけるポープの特殊な立ち位置を斟酌する必要がある。彼こそパトロンからの独立を果たし、筆一本で生計を立てることが出来た最初の作家である、とは英文学史における定説としてよく語られる話である。個人的には事実それほど単純ではないと考えるが、少なくとも彼が過渡期を生き抜いた作家であることは間違いない。だとすれば、ポープが世間的なイメージを過敏なまでに気にかけている背景には、作家として生き残るために、一握りのパトロンだけではなく、大衆一般に対するうけも良くしなければならなかった、というその微妙な立場が反映されている、と言えるのではないだろうか。

<sup>1</sup> Louise Curran, *Samuel Richardson and the Art of Letter-Writing* (Cambridge: Cambridge UP, 2016) 2-3.